

【研究会抄録】

第26回島根新生児研究会

日 時：令和4年2月6日(日) 13:00~16:30

場 所：以下の各会場からのZOOMによるリモート中継形式
隠岐広域連合立隠岐病院, 松江赤十字病院, 島根大学医学部附属病院,
島根県立中央病院, 雲南市立病院, 大田市立病院, 浜田医療センター,
益田赤十字病院

当番世話人：益田赤十字病院小児科 中島 香苗

共 催：島根新生児研究会・アストラゼネカ株式会社

1. 当院で新生児薬物離脱症候群の観察・治療を行った症例のまとめ

島根大学小児科

吾郷 真子, 山本 慧

当院では、ハイリスク分娩を取り扱っているが、精神疾患合併母体は少なくない。抗精神病薬や抗てんかん薬を内服中の母体も多く、2020年より一定のルールに沿って出生した新生児の観察を行っている。現在は全例入院の上、磯部のスコアを用いて評価している。今回、2015~2021年に新生児薬物離脱症候群の観察と治療を行った症例について現状をまとめた。44例中、91%が正期産であった。57%が複数の薬剤を使用していた。離脱症状に対し加療を行ったものは4例(9.3%)であったが、うち2例は出生後に投与を開始したフェンタニルが原因であった。加療はすべて出生後24時間までに行われていた。また84%の症例で、磯部のスコアは生後24時間までにピークを迎えていた。観察対象となる薬剤は多岐に渡るが、少なくとも生後24時間は観察することで現状は離脱症状の出現に対応できている。しかし母体の内服状況の把握と今後の新薬の登場には注意する必要がある。

2. 当科で施行した新生児外科手術を振り返って

-2021年の経験

島根大学医学部附属病院小児外科

久守 孝司, 真子 絢子, 上野 悠
人見 浩介

同 消化器・総合外科

田島 義証

2021年に、当科で行った新生児手術は9手術(8人)で、2019年の27手術、2020年の13手術と比べると、明らかに減少していた。

市町村別内訳は、松江市1人、出雲市3人、雲南市2

人、益田市1人、吉賀町1人だった。疾患別内訳は、先天性食道裂孔ヘルニア1例、先天性食道閉鎖症(グロスA型)と先天性十二指腸閉鎖症合併例1例、先天性空腸閉鎖症1例、先天性十二指腸狭窄症1例、肥厚性幽門狭窄症2例、胎便関連腸閉塞症1例、低酸素性脳症1例、であった。

昨年経験した新生児手術を振り返り、症例や疾患の解説を行った。

3. 妊娠性肝内胆汁うっ滞母体より出生した男児例
~娩出のタイミングをどう考えるか?~

益田赤十字病院小児科

中島 香苗, 秋好 瑞希, 三浦 勤
同 産婦人科

片桐 敦子, 片桐 浩

妊娠性肝内胆汁うっ滞(intrahepatic cholestasis of pregnancy: ICP)は全妊娠の0.1~1%, 一般的に妊娠後期に発症する手掌・足底の発疹を伴わない掻痒感、総胆汁酸高値を特徴とする。

その主たる合併症は、突然の子宮内胎児死亡である。胎児死亡の機序は不明であり、急性発症するため胎児心拍数モニタリングでは予測できないとされる。次の妊娠におけるICP再発率は60~90%と高率である。

ICP合併症と考えられる妊娠37週3日での子宮内胎児死亡を経験したため、次妊娠では35週1日に予定帝王切開術を施行、出生した児を経験した。児は2,280gで出生し、新生児一過性多呼吸の診断でHigh-Flow Nasal Cannula療法を施行した。経過は良好で、日齢14に退院した。

児の娩出時期について検討し、児の経過について報告する。

4. COVID-19 感染妊婦の帝王切開術の受け入れ準備を行って

松江赤十字病院周産期センター

産科・GCU 病棟

舟越 彩織, 渡部 里磨, 藤原由美子
伊藤 千晶, 岩成めぐみ, 東條 海子
真鍋 敦, 成相 昭吉, 秦 美香子

当院で COVID-19 感染妊婦の分娩管理を開始する方針となり2020年12月より体制を整えることとなった。COVID-19 感染妊婦は帝王切開術での分娩が推奨されている。当院の手術室は陰圧ルームがないため、COVID-19 感染妊婦の帝王切開術は病棟分娩室にて実施することとなり、機器整備が行われた。

当院の既存の帝王切開マニュアルを元に感染予防策を講じた分娩室での帝王切開マニュアルを作成し、手術室・NICU・感染管理室・麻酔科・薬剤部と共に数回のシミュレーションを実施してマニュアルの修正を繰り返し行った。2021年9月 COVID-19 感染の妊娠32週妊婦の入院があり、中等症からさらに重症化する恐れが強いため全身麻酔下での緊急帝王切開術を行った症例があった。COVID-19 感染妊婦帝王切開術の実施に至るまでのマニュアル作成の過程と帝王切開術に対応できる分娩室の準備、感染予防に準じた分娩室のゾーニング、シミュレーションの内容、緊急帝王切開術実施後の修正点及び取り組みについて報告する。

5. コロナ禍における NICU での MRSA アウトブレイク対応

松江赤十字病院 NICU

尾田 彩, 丸山あゆみ

【はじめに】当院では2015年より MRSA 感染対策として積極的監視培養を導入した。その中で、2020年3～4月にかけて、MRSA のアウトブレイクを経験した。コロナ禍において个人防护具が不足する中での MRSA アウトブレイク時の介入、結果について報告する。

【アウトブレイク事例概要】2020年3月～4月に計6名から監視培養で MRSA 検出。

【介入】現状把握・分析、手指衛生直接観察、个人防护具使用の見直し・変更、環境培養、環境整備の確認・徹底、哺乳の準備・片付けの確認・改善、便処置の確認・改善、家族への感染対策指導

【結果】介入を行ったことで収束し、2020年度2件、2021年度は1月までに1件の発生があった。

【結語】医療関連感染から児を守るためには、基本的な感染対策（手指衛生・環境整備）の徹底、MRSA 発生

時にはリアルタイムで現状把握・分析を行い、介入することが大切である

6. 第2子以降の児に対する父親の愛着形成についての一考察 ～コロナ禍にあり面会制限や立ち会い分娩ができなかったことによる影響～

NHO 浜田医療センター 4北病棟

吉川 景子, 塩川加緒理, 原 幸子
高野 養子, 周藤 葵, 石本 泰子

当院では、一昨年よりコロナ感染防止対策のために出産時の立ち会いや面会は実施していない。そのような中立ち会い分娩が出来なかった父親が、退院後に児への愛着が持てないことを知った。先行研究では、夫立ち会い分娩の妻に対する効用や育児への高い関心については報告されているが、立ち会い分娩の有無と児の愛着形成についての報告は少ない。そこで今回、立ち会い分娩や面会制限が出生児に対する父親の愛着形成に変化を及ぼすのか、また児に対する父親の思いを明らかにすることを目的に質的研究に取り組んだ。令和3年11月～令和4年1月に、第1子の出産には立ち会ったが、第2子以降立ち会えなかった生後1年以内の児を持つ父親3名を対象とした。対象者に、研究の趣旨を説明し同意を得た後、インタビューを行い、その内容は逐語録に起こし、KHcoder のテキストマイニングにより父親の思いを分析した。なお、研究の実施においては当院の倫理審査委員会の承認を得た。

7. 児が NICU に入院した母親の母乳分泌に影響する要因

島根県立中央病院 NICU

岩佐 美香, 初山 瑞季, 曾田 円佳

NICU に入院した児を持つ母親の母乳分泌量の変化とそれに影響を与える要因を明らかにすることを目的として、2015年度～2020年度に入院した児とその母親を対象に、分娩様式や平均搾乳量など15項目について後方視的調査を行った。うち10項目を2群に分け平均搾乳量との関連を t 検定で分析した。産褥1～4日はいずれの項目においても有意差はなかった。産褥5日では初産婦40.5±29.5 ml, 経産婦49.1±29.8 ml と有意差があった。また、電動搾乳機使用群48.1±30.2 ml, 未使用群34.4±24.4 ml と有意差があった。一方で分娩様式や在胎週数、合併症の有無、母退院時の EPDS、カンガルーケア実施の有無では有意差はなかった。このことから、経産婦であることと電動搾乳機の使用が母乳分泌に影響することが明らかとなった。母乳栄養を望む母親のケアとして、

母乳分泌が少ない場合や、母親の搾乳手技が未熟な場合には電動搾乳機の使用も有効であると考える。

8. 当院における災害時の新生児避難対策についての取り組み

益田赤十字病院 4階東病棟

吉岡 萌実, 有田 有希, 平原 祥子
福原 孝子, 岸田 由紀, 新田 昌子
三浦 史子

近年、大規模地震の発生や自然災害が頻発している。災害発生時においても新生児医療体制を維持できるよう、日ごろから備え、必要な手順をあらかじめ決めておくことで、被害を最小限にすることができる。

当院は地域周産期母子医療センターの役割を担っており、新生児搬送を考慮した災害対策を強化していかなければならない。しかし、当院の既存の新生児避難マニュアルには、医療処置を必要とする児の避難方法について含まれていなかった。そこで、日本新生児生育医学会・新生児医療連絡会が提示している「災害時の新生児医療体制復旧手順」を参考に、当院の新生児避難マニュアルを修正し、児のトリアージや避難方法についての内容を検討した。そして、災害対策への意識を高め、避難訓練を実施した結果を報告する。

9. NICU スタッフへの災害対策に対する意識の向上を図る取り組み

島根大学医学部附属病院 NICU

三代 侑佳, 門城すみ子, 竹田美也子
同 周産期母子医療センター
山本 慧, 吾郷 真子

当院 NICU では、医師と看護スタッフにて、担当患児の割り振り表を活用したトリアージと、チェック表を用いた災害時の必要物品や移動方法の確認を行ってきたが、患児全員分のチェックには時間を要し、習慣化には至らなかった。

改善策として、各ベッドサイドに設置してあるパソコンのスクリーンセーバーの活用に着目し、トリアージと災害時の必要物品、移動方法をイラストで表現した画像を各パターン作成し、患児に合った画像を選択する方法を導入した。また、日勤と夜勤の1日2回行う医療機器の安全チェックの項目に画像選択を追加した。これらの対策により、患児を担当するスタッフのトリアージの機会が増えたことで徐々に能率が上がり、スクリーンセーバーにより可視化されたことで、都度スタッフが意識を向けられるようになった。以上のことから、スタッフの災害対策に対する意識向上の一助となったと考える。今回、この取り組みについて報告する。

【特別講演】

「NICU に入院している新生児の痛みから見えるもの
～Family Centered Care を目指して～」

県立広島病院

副院長・新生児科主任部長 福原 里恵 先生